

私達の手元に残った懐かしい写真は

その時代のかげ替えのない卒業写真でありたいですね

昭和からのエール

(青春、幼少期編・その3)

伊藤均

目次

プロローグ	1
第1話 体温計	1
第2話 床屋さんがいつぱい	2
第3話 懐かしい街・門東町界限1 (鉱石ラジオとナポリのナポリタン)	3
第4話 懐かしい街・門東町界限2 (火の見やぐらと四代目)	6
第5話 懐かしい街・門東町界限3 (市役所前から平和通りへ)	7
第6話 子供の頃の遊び：ビー玉自動車	9
第7話 子供の頃の遊び：プーリー飛行機	10
第8話 子供の頃の遊び：ミニジャンプ台	12
第9話 子供の頃の遊び：宝探し	14
第10話 カバヤキャラメルくうぼん券	15
エピローグ・謝辞	16

私達の手元に残った懐かしい写真は
その時代のかけ替えのない卒業写真でありたいですね

昭和からのエール

(青春、幼少期編・その3)

伊藤 均

「プロローグ」

私の街歩きエッセイ『昭和からのエール』も青春・幼少期編第3作を迎えました。今回は二つの目玉があります。一つは子供の頃の遊びです。私達が子供だった昭和30年代の面白かった遊びを思い出し、最近の子供の皆さんにも楽しんで頂けるのではないかと考えて、いくつかを紹介することにしました。現代のお子さん達はゲーム機などに囲まれ、遊びに不自由しないでしょうが、ここにご紹介した、自分でものづくりする工作や、自分たちで遊びそのものを造り出すことの面白さもぜひ味わっていただきたいのです。記事は小・中学生のお子さん達に合わせて書いていますので、表現も読んでいただきたいお子さん達の年齢に合わせてあります。ご了解ください。

もう一つは、これも時代背景は昭和30年代後半から40年代前半にかけてですが、米沢市内の中心に位置して賑わっていた門東町周辺の思い出マップを、子供だった私の視線で書き出してみました。人は皆、沢山の思い出のかけらを持って生きています。このマップを読者の皆様のご記憶と重ねて頂ければ、きつと皆様の思い出もよみがえり、懐かしくお読みいただけたことと思います。それでは思い出のページを開いていきましょう。

「第1話 体温計」

子供の頃、朝起きた時に微熱があるようだったので、仮病を使うことにしました。風邪であればみんなに移さないためにも学校を休んだ方が良くからと、母に話しました。

こういう時のもつともらしい理由付けは、やけにスラスラと出てきます。その上風邪などで学校を休むと、一応布団の中になければなりません。母が優しく接してくれることが多かったのです。外には出られないので遊ぶのに少々不都合でしたが、おいしいものが食べられるという誘惑には勝てません。何せ私の子供の頃、甘いシロップに入って、皮がむかれたみかんの缶詰はすごい馳走だったのです。

母は私の枕もとで私の額に手を当て、「うゝん、少し熱があるのかねえ、まず体温を測ってみようか」とつぶやきながら、体温計を持ってきました。体温計を何度か振って低い温度にすると、私に測っておくように言い残して奥の部屋へ行ったのです。私は体温計を脇の下にしっかりと挟んで測れば風邪をひいた時の体温ぐらいにはなるだろうと思っていました。が、何せ仮病ですから、測った後に「なんだ、大したこと無いじゃないの」などと母に言われて学校へ行く羽目になつては、学校を休めないばかりか、みかんの缶詰を食べる可能性も当然なくなってしまう。かといって、熱もあまり高いと医者に連れて行くなどと言われてはかたがたありません。ほとんどどの体温であつて欲しい訳です。少し熱はあるが、38度もあるようでは困るから、37度をちよつと超えたぐらいの、医者にはいかずに、学校を休んで家で直してしまつたほうが良いと言ってもらえる体温を思い浮かべたのです。うまいことに枕もとには、母が飲みかけた温かいお茶の入った急須がありました。私は脇の下から体温計を抜き出し、湯飲み茶碗にお茶を注ぎ、慎重に体

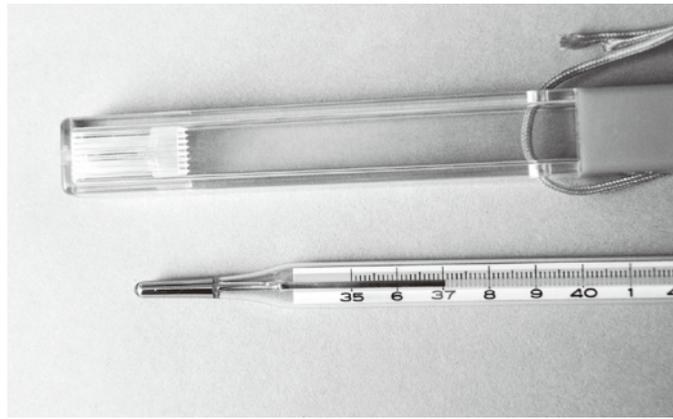


図1 37度ぐらいがちょうどいいんですけど・・・

体温計の先を湯につけました。ほどよい温度になるだろうか
と見ようとしたその瞬間、あゝ不思議、魔術のごとく体
温計そのものが挟んでいた指の間からなくなってしまうた
のです。一瞬何が起きたのだろうと思いましたが、つまん
でいた指先には体温計の一部が残っています。そして湯飲
みの周りには小さな銀色の粒が沢山飛び散っているではあ
りませんか。何の事はない、水銀があつという間に膨張し、
体温計が破裂したものでした。小学校では、『体温計には
水銀、寒暖計には赤く染めたアルコールという物質が入っ
ています。水銀やアルコールは温めると膨らむ性質があつ
て、それを膨張と言います。温度に合わせて膨張や収縮す
ることを利用して、目盛りのついたガラス棒の中に水銀や
アルコールを入れて、体温計や寒暖計を作っているんです
よ』と、理科の時間に先生から聞いていました。だからこ
そ温かいお茶に体温計をつければ、私が望むほどよい温度
を示してくれて、母に手渡すことができるはずと考えたの
でしたが、こんなに瞬間的に膨張し、しかも破裂するとは
思いませんでした。怪我をしなくて良かったです。

結局何とか取り繕わなければならない羽目になった私は、
「大変だ！大変だ！脇の下に挟んでいた体温計が折れた！」
と大声を出して騒ぎました。聞きつけた母が部屋に入って
きて、「あら大変、水銀は体にすぐく毒なのよ」などとバ
タバタし、水銀玉を取り除こうとしますが、水銀玉はチヨ
ロチヨロと逃げてつまめません。そこで古いハガキを出し
てきて、そのはがきに水銀玉を載せるようにして捨てに行
きました。

やれやれ、その水銀玉騒ぎのせいで私の体温のことはど
こかへいつてしまい、風邪も既成事実となって、その日は
学校へ行かなくて済んだのです。しかし悪いことはできな
いものですね。騒ぎのおかげで肝心の、みかんの缶詰でも
食べて体を休めたほうが良いのではないかと私から提案す
ることはさすがにはばかられ、ありつくことはできません
でした。

私が子供の頃の体温計は、今回の話に出てくるように、
図1のような水銀体温計でした。現在の体温計はほとんど
がサーミスタという電子素子で温度を測り、デジタル表示
する体温計になっていますから水銀が膨張して破裂するこ

とはないでしょうが、熱いお湯につければたちまちエラー
となり、センサーも壊れてしまうかも知れませんのでご注
意を。

そういえば、みかんの缶詰のみかんは、三日月形をした
袋状の皮がきれいにむかれています。そんなふう加工
して缶詰にしているのだろうかと思ひ、以前調べてみたこ
とがあります。何と希塩酸溶液と水酸化ナトリウム液の中、
つまり食品添加物の中で使用を許された酸やアルカリの溶
液の中で袋を溶かし、残った実の部分だけをきれいな水で何度
も洗った後、シロップ液に漬けたものがみかんの缶詰との
ことでした。私にとって、体温計と切っても切れないみか
んの缶詰です。

「第2話 床屋さんがいっぱい」

私が子供の頃、米沢の旧市内を東西に横断し、鉾山があ
った八谷（やたに）を経て、福島県喜多方市方面へと抜け
る街道筋、現在の国道121号線の一部に桂町（かつらち
よう）があり、北堀端町（きたほりばたまち）などと並ん
で、商店街が連なつて賑やかでした。その桂町の中ほどの
大通りに面して片桐理髪店がありました。一見マイル張りの
ように見える看板建築の玄関になっていて、入り口扉の
横には床屋のシンボルである赤、白、青三色のサインポー
ルねじりん棒が回転し、結構大きなシユロの木2本ほどと
一緒に立っていました。ねじりん棒はじつと見ていると自
分の体も一緒に上空へと昇つて行つてしまふそうですし、
なぜ中のねじりん棒が上に抜け落ちないのか不思議に思っ
ていました。通りに面した窓からは店内の大きな水槽が見
えましました。琉金（りゅうきん）がゆつくりと泳いで、こつ
ちを眺めています。店の奥ではご主人がお客様に掛ける大
きな散髪エプロンをたたんだり、新聞を読んだりしていま
したが、いつもアイロンがシャキッと効いた真つ白なワイ
シャツを着こなし、そののど元には、昆布巻きを大きくし
たような、真つ黒なりボンをつけていたのです。姿勢も良
くておしゃべりな床屋さんだなとも思ひながら、私はお
店の前を通つていたものです。

そんなある日、私の母が合唱団のポスターや公演案内パ
ンフレット配布のお手伝いをしていた関係で、『音楽の夕



図3 レストラン・ナポリにて。「おおメロンですか、こりゃどうも」(昭和36年)

べ』を聞きに行くことになりました。会場は桂町の交番がある交差点から2〜3分北に行った教会だと言います。教会と言えば私がつと小さい頃にも母に連れて行かれたことがあり、多分ミサの様なものに付き合われたのだと思います。大人の参加者にはガリ版刷りの歌詞カードの様なものを渡され、牧師のリードのもと、皆が声を揃えて歌っています。しかし子供の私には歌詞の意味が全く分からず、大人のための音楽会やミサなんて迷惑な話でした。讚美歌にある『主は来ませり』は、シユワキとマセリに分かれて聞こえ、シユワキもマセリも聞いたことがない言葉なので何のことだろう?と本気で思ったものでした。その時の記憶があったので私は行きたくありませんでしたが、母は「今日の音楽の夕べはとても楽しい音楽会だから一緒に行くんだよ」と言うので、渋々行くことにしたのです。

今日の会場はそう広くも無いせいも、歌い手が登る壇と聴き手の距離がすごく近いのです。やがて盛大な拍手に迎えられると男声合唱団が登場しました。そしてその合唱団は何と全員が御揃いのスーツに白いシャツで、のど元に、あの片桐理髪店を見た昆布巻きをつけていたのです。私は、あの昆布巻きリボンを着けるのは床屋さんだと思っていましたから、音楽の夕べだというのに、なんでこんなに沢山の床屋さんが出てきたんだろうと驚いたものです。後に蝶ネクタイという正装の一つなのだとなりましたが、人間、最初に見たものの印象は強く刷り込まれ、思い込みとして残るようです。

『音楽の夕べ』は司会者の紹介でプログラムが進みます。歌われたのは、『カチューシャ』、『灯』、『トロイカ』など、ロシア民謡が主です。暗く、寂しい曲が多いなと思っていました。『ボルガの舟唄』はその最たるもので、各パートが「エイコーラー」と掛け合いながら進みます。歌い手と客席との距離が近いせいか表情がよく見えます。そのうち歌い手たちが絞り出すように歌う声に感情移入して、表情まで苦しそうにするので、「エイコーラー」のたびに観客にも苦しい表情が乗り移ってしまいましたよ。だから『赤いサラファン』という歌になった時には曲の雰囲気は明るく変わったので聴いている皆がほっとしました。

合唱団は一曲歌い終わるたびに全員が客席に向かって一

斉にお辞儀をします。私もお辞儀を返さなければならぬと思つて一曲ごとにお辞儀を返していましたが、そのうち眠り込んでしまったのか、深々とお辞儀を返した弾みに頭から床に向かつて転がり落ちてしまいました。母があわて、前列の長いすの下にはまり込んだ私を引つ張りあげ、周りにお詫びを言っているのが頭上に聞こえました。それを合図にしたかのように、曲目は突如としてカンツォーネへと切り替わり、ソロの方が、『サンタ・ルチア』や『帰れソレントへ』などを朗々と歌うので、ビククリして目が覚めました。この時も私は『サンタ・ルチア』を聞いて、「え?サンダルがどうかしたって?」と思ったことでした。やっぱり歌は、歌詞の意味が分からないと楽しくありません。私は蝶ネクタイを見ると今でも、昆布巻きをつけている床屋さん、男声合唱団のロシア民謡が重なって思い出されます。

「第3話 懐かしい街：門東町界隈1 (釜石ラジオとナポリのナポリタン)」

市街地中心部の街角風景は、その時代の勢いや賑いを象徴しています。昭和30年代、子供だった私の視線で見えた米沢市の街角風景が懐かしく、図2に『思い出マップ』を作ってみました。公共の建物や商店などを並べたイラストマップですが、読者の皆さんもご記憶の建物・お店があるはず。一緒にマップをたどってみませんか?

さて昭和30年代の米沢市中心部、当時の町名が門東町下の町(もんとうまちしものちよう)からスタートしましょう。市の公会堂前を過ぎ、門東町通りを北に進んだ一角に、通りに面して懐かしい建物、店舗が数多くありました。紅屋、あさひ鮎、原徳電気、ナポリなどが思い出深いところです。

門東町通り東側の原徳電気さんは確かビクターの製品を扱っておられて、店の入り口にはビクターの象徴である、「ヒズマスターズヴォイス」の、耳を傾けた犬の置物があったように思います。そして私は小学4年生となった昭和33年頃から、『模型とラジオ』や『模型と工作』といった青少年向けの模型制作月刊誌に目を通すようになり、真空管



図5 米沢市、まちの広場①（平成22年）



図4 米沢市役所旧庁舎
東京オリンピック火リレー（昭和39年）

式ラジオの回路図などはチンプンカンプンでしたが、それでもできる鉱石ラジオ、ゲルマニウムラジオ“といった記事から入門しました。鉱石ラジオ用の鉱石は模型店で入手したものでしたが、鉛筆ほどの太さで2センチメートルぐらいの長さの黒い筒の両端が金属製キャップとなっており、そのキャップをはずすと米粒ぐらいの大きさの、銀色に光る鉱石がコイルバネに押されて入っていました。この米粒のようなかけらで検波してラジオが聴けるようになるのかと、しげしげと眺めたものです。鉱石ラジオからダイオードラジオへと進み、次いでトランジスタラジオの製作へと進んでいきましたが、鉱石ラジオを自作して、クリスタルイアフォンからNHKラジオ番組が聞こえてきた時の感動は忘れられません。

ラジオの配線や模型の制作に手を染めるとはんだ付けが不可欠であり、はんだごてが必要になります。私がそのはんだごてという工具を初めて買ったのが原徳さんだったのです。ご主人は親切な方で、「はんだごてはアイロンと同じで中にヒーターが入っているんだ。電気が沢山流れるから模型で使うような細いコードではなく、太いコードを使ってプラグをつけて100ボルトから取らなければならぬんだよ」と教えて下さり、はんだごて用のリード線をつけてくださったのです。そして「家の中で100ボルト以上の電気作業をするときは、必ず座布団を敷いて上に乗り、出来るだけ手袋もして絶縁を心掛けて作業しなさい」とも言葉を添えてくださったのです。電気には回路という作用の面だけでなく、エネルギーとしての容量という面が有り、それに見合う配線をしなければならぬ事、便利な電気も不用意に扱うと危険だという事を教えてくださったのでした。私が小学生だったという事もあるでしょうが、単に品物売るだけでなく、安全に、そして目的を果たすように指導して頂いた事にはとても感謝しています。このようなコミュニケーションは大切な事です。

次は原徳さんの北側にあつたあさひ鮎さんです。あさひ鮎さんへは親戚の人にくっついて行ってお相伴にあずかったのです。カウンター前のケースに並んでいるさまざまなお菓子が珍しく、好みのネタをその場で握ってもらって食

べる間合いが、子供ながらに意気だと感じ取ったのです。しかし子供の私でしたから、大人の世界の握りずしなどは面食らうばかりで、もつぱら巻物のかんぴよう巻などを食べることにしました。カウンターに置かれているのはしょうがを甘酢で漬けたもので、「がり」というのだと教わりました。がりを食べてみたところ口の中がさっぱりして意外に辛くはなく、食が進みます。喜んで何枚か食べたところ、店のおやじさんが「その調子だったら、わさびも少しぐらい付けてみようか？」などと言って、わさびを付けたらかっぱ巻きを作ってくれました。一口噛み締め、紫蘇の葉の香りと共にツンと来る辛さが鼻に抜けました。ちよっと涙も出たものの、「おお！これで俺も大人になったわい」などと実感したものでした。子供の片手では持てないほどの大きい湯飲みを両手で支え、お茶を注いでもらい、調子が出てきた私は、その時店にあつたきゅうり3本分を全部、わさびの利いたかっぱ巻きにしてもらって平らげました。店の女将さんに「何てきゅうりの好きな子だこと！」などとあきれられながら大笑いされた私の鮎屋デビューでした。わさびやしょうが、辛子などの香辛料や、ほろ苦さなどの味を覚えると、食の世界が急に広がりますね。

原徳電気南側には洋食のナポリがありました。レストランになっていて、洒落たメニューが沢山ありました。図3はナポリで開かれた私の親戚の宴席風景で、私が大好きなメロンを配膳してもらっているところです。ナポリは様々なパーティーを請け負っており洒落たメニューが沢山あったようですが、私が良く覚えているのはスパゲッティです。当時、スパゲッティにはミートソースか、トマトケチャップを沢山からめたナポリタンの2種類ぐらいしかなかったように思います。カルボナーラやボンゴレ、いかすみは言うに及ばず、たらこなどの和風な味付けをしたものも皆無でした。それを考えると生活のゆとりと共に味の世界が広がるのは嬉しい事ですね。私は酸味を抑えるためか少し甘さを加えたナポリタンが大好きでした。お子様ランチを頼むと、ボートの底の内側のように入れたライスト、そのそばにはナポリタンのスパゲッティがついてきます。一品料理としてのスパゲッティも有りましたが、



図7 米沢市・南置賜郡農業会館
オリンピック聖火リレー（昭和39年）



図6 米沢市、まちの広場②（平成22年）

このような形でおかずの一種として添えることも多かったようです。ライスを缺んで反対側には、ウサギの耳の形に皮を残して四つ切りにしたりんごが添えられ、ライスの頂上には小旗が飾り付けてありました。お子様ランチにはこの他にもおかずやデザートが付いていたようですが、色んな食べ物を味わえるお子様ランチはお徳用でした。ナポリタンというスパゲッティの調理名称は、このナポリに連れて行ってくれた母から「ナポリのナポリタンって覚えるんだよ」と言われ覚えたものです。ナポリの2階からは門東町の通りを見渡すことができ、人通りが多いのは賑やかでいいなと思ったものでした。

〔第4話 懐かしい街・門東町界隈2〕

（火の見やぐらと四代目）

さて、私が今回のエッセイの元となる街歩きをした時に、門東町にある、明治時代から続く鰻料理の老舗、可奈免の四代目御主人とお話する機会がありました。四代目は平和通りと立町に挟まれた一帯を我が庭として育ったそうで、料亭や飲み屋までが夜遅くまでひしめく界隈ですから、ませたお子様に育ったのではないかなど私は思ったのですが、ご心配なく。昭和30年代に子供だった四代目はやんちゃな事をするのに忙しかつたそうです。

中でも盛り上がったのは、私が火の見やぐらを話題にしたときでした。市役所が門東町角にあったころ、市役所のすぐ北隣に消防署があり、そこから少し奥まった敷地に背の高い火の見やぐらが立っていました。東京タワーが建設されているというのを聞いた時、この火の見やぐらに似た大きなものが建つのだろうかとは思いましたが、この火の見やぐらだけでも十分に大きかったです。ただし、門東町の火の見やぐらは三本足で建てられているように見えるのに、東京タワーは四本足で建てられると聞いて、何故足の数が違うのだろうかと思議に思ったものでした。火の見やぐらは銀色の鉄骨で組まれ、長いはしごを昇っていくようにできており、やぐらの頂上は部屋のようになっています。部屋の周囲は監視をする人の腰より少し高い柵で囲まれた回廊になっており、回廊中央の部屋も四角い部屋ではなく、巡回するのに都合のよい円形に近い形で作ら

れているように見えました。ベージュ色の帽子をかぶり、首から双眼鏡をかけた監視の人がゆったりとした歩調で反時計回りに回廊を巡回していましたが、1周を何十秒かで回るよう決められていたのでしょうか。昼ごはんは降りてこないで、あの部屋まで弁当を持って行って食べるの难道うかなどと、余計なお世話の事を私は考えながら見上げていたものです。四代目の記憶では、昭和30年代頃までは、火事が発生すると火の見やぐらの拡声器から、『〇〇町の××さん方から出火、ただいま炎上中です』などと、情報が大声で、市内に向けて発せられていたそうです。

一方、私と同世代の四代目は地元ということもあって、近所の子らとつるんで度胸試しに、この火の見やぐらへ何度も昇った事があるそうです。はしごを昇る時は上を見て昇るし、友達の手前サクサク昇るのだそうですが、上のほうに行つていざ降りようとすると当然急角度のはしごが待ち構えており、下をのぞくととも降りられなかったそうです。うろろうろしているうちに大人達が気付いて騒ぎになり、昇つてきて、抱きかかえて降りしてくれました。もちろん度胸試しを繰り返すたびに、こつてりと油を絞られたそうですが、火の見やぐらの屋根は市役所の屋根の色に合わせたのでしょうか、緑色に塗られ、てっぺんには風の向きを調べる気象観測用の矢羽根が突き出ていました。屋根の傍らには、黒い四個のお碗を腕木で支えた形の風速計が回転していました。度胸試しの舞台とされた火の見やぐらは苦笑いしながらやんちゃ坊主たちの成長を見守っていたのかも知れません。

火の見やぐらは消防署と切っても切れない関係ですが、消防署の建物は昭和40年代には平和通りを門東町交差点から西へ少し進んだ南側に移動しました。消防署の脇には消防ホースが何本も並べて干してありましたし、ロールにして消防車に積めるようになっていました。建物の扉は常に開けてあり、いつでも出動できるようになっています。目にも鮮やかな赤い消防車には唐草模様で金色の縁取りがなされ、建物内側の白い壁に映えて、すごい迫力でした。自動車の車体の色は原則自由だが、緊急自動車である消防車の赤い色は、自家用車には使つていけないのだと聞いた

事がありました。この時代だけの話だったのでしようか。消防車の助手席の脇には手廻しのサイレンが装備されていましたし、大きな鐘と、それを鍮打つハンマーも後部座席近くに付いていました。消火活動が終わったあと、この鐘を鳴らしながら戻って来ていたようです。この鐘はしんちゅうで出来ているのか、よく磨かれて金色に光っていました。火事や災害などの発生を知らせる半鐘や鐘は、単に緊急事態の発生を知らせる注意喚起の音だけでなく、その打鐘する1音の長さや音の間隔を信号として、災害の切身や状態を伝達していたといえます。現在のように通信手段が発達してくると半鐘などは使われる機会も無いのでしようが、半鐘を使っていた時代の人の生活の知恵はすごいものだと思えますね。

次はこの消防署の建物の斜向かい、市役所の西側にあった、木村屋という美味しいパンを焼いて売っているお店に向かいます。私は母と市内に出ると、この木村屋でしばしばクリームパンを買ってもらいました。野球のグローブのようにパンの片側が5つの山に分かれているのがクリームパンの特徴なのだ。母に教えてもらいました。そういえばグローブの形をしたジャムパンなどは見たことがありません。クリームパンのあの独特の形には何かいわれがありそうですね。ご存知の方は教えてください。甘さ控えめのクリームが子供心にも響いて好きだったという話を四代目にしたところ、なんと四代目もこの木村屋によく通ったのです。お菓子の少なかったその頃に、木村屋ではしゃれたシュークリームを作って販売していたのだそうです。ただし夏場など気温の高い時期はクリームがすぐ痛むので、冬に限られており、雪の中をよくシュークリームを買いに通ったと話して下さいました。四代目の冬期限定シュークリームといい、私のクリームパンといい、子供の頃の食べ物への印象は強く残るものですね。市役所と木村屋の間に挟まれて北に伸びる路地脇にはちよっとした川が流れ、なぜか柳の木が並木のように植えられ、飲み屋や旅館などがある飲食街へ続いていたのを覚えています。東京の“銀座の柳”にあやかっただけかも知れません。

「第5話 懐かしい街・門東町界隈3」

（市役所前から平和通りへ）
昭和30年代前半、私は小学生になっていました。門東町と平和通りの交差点北西の角には市役所の庁舎がそびえ、通りは繁華街へ続いて賑わっていました。市役所の玄関は、十字路の交差点を隅切りし、東南の角が間口の広い玄関になっていて、どの方向から来る人も出入りしやすい広場のように造られていました。小学生の私が仰ぎ見る市役所の建物は行政を担う風格にあふれ、市の中心部に相応しい外観でした。昭和39（1964）年に開催された東京オリンピックでは、日本各地から聖火のリレーが行われましたが、この市役所庁舎正面玄関前でも華々しい聖火リレーの中継が行なわれたのです。図4は吉池慶太郎市長による市役所前でのリレー用聖火点火の様子です。多くの市民の目が聖火トーチに注がれました。平屋か2階建てがほとんどで、3階建ての建物などは数えるほどしかなかった当時の市内にあつて、市役所庁舎は背の高い堂々とした建物で目立ったものです。老朽化が激しかったのかもしれませんが、大正時代の建築の面影が香る建物であり、市役所を現在の所在地である金池地区に移転する際に、補強するなどして保存し観光事業の一部に充てれば、米沢市中央のランドマークであり続けたかも知れません。市役所旧庁舎は昭和45年に解体され、跡地は図5や6に示す公園・まちの広場となっていました。その公園も平成28年春の竣工を目指して、新文化複合施設（図書館・市民ギャラリー）の建設が進んでいます。門東町通りと平和通りとの交差点は単なる十字路ではなく、米沢市の歴史を深く刻んで市民の未来を見つめているのだと思います。図7は市役所旧庁舎と平和通りを挟んだ交差点南側角に有った米沢市・南置賜郡農業会館の建物から、1、2階全部の窓を開放して人が鈴なりになつて、昭和39年の聖火リレーを見送っているところです。昭和39年に開催された前回の東京オリンピックから、東京での第2回開催となる2020年オリンピックまでには56年の歳月が流れることになりましたが、無事、盛大に、多くの日本人選手の活躍を期待して声援を送りたいですね。

門東町と交差する東西の通りは平和通りで、交差点を東

に歩くと、通りの南側には飲食店をはじめとする様々な店が軒を連ねていました。昭和30年代には米沢市内の中心部商店街で七夕祭りが行なわれた時期があったのです。娯楽の少なかった当時の人々にとって、うちわを使いながら夜の街を散策できることは、行動する時間帯が広がる喜びでもあったと思うのです。七夕飾りが最も賑やかな区域に思われた平和通りでしたが、私が時々訪れたのはその平和通りの大正堂という大きな書店でした。今で言う看板建築に当たるのかもしれませんが、背の高い建物で、店の正面は洋風だった記憶があります。店内は高い天井のすぐ近くまで書架があつて各分野の専門書がたくさん置いてあり、学生にとって便利な書店だったと聞いたことがあります。大正堂のすぐ近くには、高校の教員だった私の父が教員仲間の方さんと飲み会や忘年会などでお世話になった永楽軒という中華の料理屋がありました。父が時々、残り物の中華料理を折に詰めてお土産で持ってきてくれるので楽しみました。

大正堂の斜向かいには、後に大沼デパート米沢店（昭和45年に開店）となつた場所に和田屋菓子店がありました。洋菓子を多く扱つており、このカステラやケーキはとても美味しかったです。箱に入ったカステラは蠟紙の上に載つており、隅のほうに行くとかステラ生地は蠟紙にくっついてしまつていますが、その辺りは溶けて茶色くなつた砂糖がカラメルになつて一段と甘いのです。しかも少しシャリシャリします。私はその食感や味が好きで、水飴をもらったカブト虫のように喜んで食べまくりました。丸いケーキの場合はクリームの上に小さな銀玉が沢山乗つていて、不思議な飾りがあるものだと思つていました。銀玉は固くてきれいですが、食べてみると米粒をかんでいるような感じがして、かすかにほろ苦く、あまり美味しいとは思いませんでしたねえ。大きい銀玉の時は嚙んだ奥歯が痛くなるほど固かつたですし、歯に詰まるんですよ。ケーキの中央にはクリームで作つたバラの花が誇らしげに並べられ、縁の部分は赤や緑に色付けし、孔の開いた筒を斜め輪切りにした砂糖菓子のようなもので飾られていましたが、今思うとあの斜めに切つたような菓子の材料は一体何だったのでしょうか。露（ふき）の茎を煮たもののようにも思

えましたが、ザラメの砂糖がまぶされていてやけに甘く、どちらかという和風な味だと感じたものでした。

またこの平和通りには昭和30年代初頭に「かくだい」というスーパーが進出し、大変繁盛したのです。ある時新聞に山のようなチラシが入つてきて米沢にスーパーマーケットという形式の店が開店することです。「かくだいは十万市民の台所」というキャッチコピーのもと、赤や青で印刷された大文字のチラシは小学生の私にも読むことができ、いかに品揃えが多く、しかも安く、一箇所の店で買える物が出来るかが宣伝これ努めてあります。広告業界には多数の有名なキャッチコピーが存在しますが、このキャッチコピーは今聴いても語呂が良く、消費者である市民を味方にしてしまう傑作ですね。「日本の特売品は卵！」などと、目玉商品もちゃんと書いてあります。私の町内のおぼちゃんたちもチラシを手元に額を寄せて相談し、「安いからどんどん買い溜めしよう」という人や、「いやいや特売品に釣られてはだめだ。一品ずつ品定めして専門に扱っている店で買おうべきだ」という慎重論のばば様など議論百出の様子でしたが、やがて皆が「いそいそと出かけて行きました。帰ってきた人の話を聞くと、並んでいるものの中から自分の目を選び、手にとって確かめ、必要な分だけ籠に入れてレジに並べば一度に清算できるという購買の形式が何とも自由で、自分が買い物をしているという充実感があつて嬉しかったという感想を井戸端会議で話していました。品物が山のように積まれているのにも驚いたといいます。私もどんなものかとわざわざ見学に出かけてみました。ただ店の前をウロウロするだけでしたが、店の入り口前の歩道にまでたらいのような生簀が飛び出して何段も重ねられ、中をのぞくとシジミが放たれています。水道のホースから常に水が注がれ、生かされている様子が新鮮でした。米沢では貝を食べる機会がほとんど無かつた時代でしたから、シジミとはいえ、貝がたらいの中で押し合いへし合いしている様子が揺れる水面を通して見えるのは珍しかったです。

昭和30年代は第2次大戦敗戦の影響が徐々に遠ざかり、食料を初めとして生活物資が豊富になつてきた時代であり、

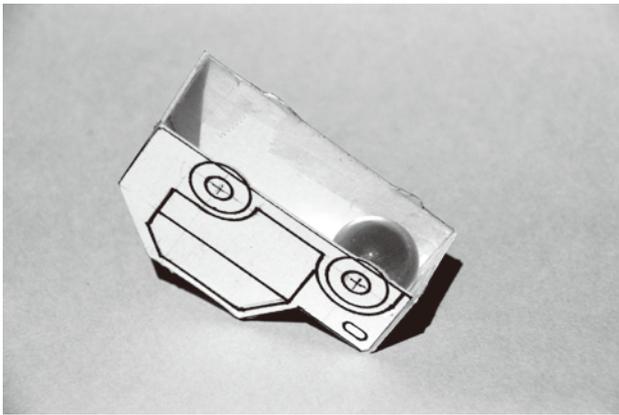


図10 ビー玉収納はボンネットの下

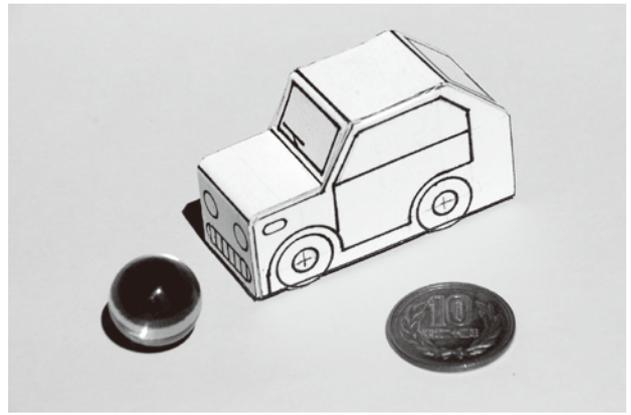


図9 組み立てたビー玉自動車。ビー玉は直径1.6センチ

スーパーマーケットの登場は、買い物も、自分の町内を出て街中へ買いに行く“という行動範囲の広がりと、良い意味での消費生活の楽しさを実感する事につながって、人々に受け入れられていったのだと思います。「かくだい」は立町の交差点角にも出店したと記憶していますから、時代の要請を受けて文字通り急拡大(かくだい)した印象深いお店です。

【第6話 子供の頃の遊び：ビー玉自動車】

私が子供の頃の友達に、近所の歯医者さんの息子さん兄弟がいました。普段は外で遊んでいますが、雨が降ってきたりすると家の中で遊ぶことになります。歯医者さんだけあって診察室の隣には待合室があり、待ち時間の長い人のために沢山の本が置いてありました。大人向けのムックもあり、マンガ本も置いてあり、サザエさんの漫画の単行本も沢山おいてありました。当時で20巻近くまで揃っていたように記憶しています。サザエさんの漫画も連載開始の最初の頃と、少したってからでは随分登場人物の絵のタッチが違うなあと感じながら読んだのを覚えています。何せ最初の頃はセリフも旧仮名遣いですからね。そして待合室に置いてあった本の中に、子供向けの、工作をして遊ぼうという趣旨の冊子があったのを見つけました。ペラペラとめくってみると、ビー玉を使って転がることを動力とした自動車を紙で作って遊ぼうという記事があったのです。子供の時代ですからビー玉はいつも私達のポケットにありましたし、外の雨は止みそうになく、簡単な工作だったらこの自動車を作ってみようという事になりました。その時の本の記事に沿って作った、名付けて「ビー玉自動車」の作り方を思い出しながらここに再現してみました。

材料は1台当たり、直径1・6センチメートルぐらいのビー玉1個と、菓子箱などの薄手のボール紙、そしてセロファンテープです。このビー玉自動車はビー玉の大きさに合わせて作れるので、用意するビー玉は少しぐらい大きくても小さくても構いません。1・4センチから2センチメートルぐらいまでのビー玉に合わせるのが造り易いでしょう。厚さ0・5ミリメートルぐらいの薄手のボール紙に、図8の自動車の図を描きます。この図8のように、立体的

物を平面に広げた形で書く図面を展開図(てんかいず)と言います。このように材料に加工するための線を描く作業は、“ケガキ”作業と言いますが、「うまくケガこうぜ」などと友達に声を掛け合いつつながら工作すると、お互いちょっと大人になった気がしますよ。このエッセイに載せた図8は、原寸図(げんすんず)と言って、設計の大きさそのもので書いてありますから、コンビニなどへ行つて“等倍”コピーをとってきて材料のボール紙に糊で貼っても構いません。このように準備した自動車の図の線に沿ってはさみで切り出します。切り出した車体は、図9を参考に折り曲げてください。折り曲げた稜線(りょうせん)のようにせん、つなぎ目となる線の事)は、セロファンテープで貼り付けて写真の形にしてください。セロファンテープは表から貼っても良いのですが、車体の内側から貼った方が出来上がった自動車の見栄えがいいですよ。そして車体にカラーペンで色を塗ったりゼッケン番号をかいたりするのは、セロファンテープで車体を組み立てる前に作業した方が上手くきれいにできます。

さてこれで完成。ビー玉を床に置き、出来上がった自動車の車体をビー玉にかぶせます。そして車体の横を指で挟んで軽く前に押し出して手を放します。ビー玉が床を転がっていくのに連れて、車体の前部の内側を押すので、ビー玉動力自動車は軽快に走り始めます。図10にビー玉自動車を走らせる時の、ビー玉の位置を示しておきます。

このビー玉自動車はビー玉の大きさに合わせて車体の幅とビー玉が入るボンネット部分の高さを決めて作りますが、ビー玉の直径よりも、車体の幅とボンネット内のりの高さが1ミリか2ミリメートル大きい寸法になるように作るのがコツです。大きく造り過ぎて隙間が大きいと、転がるビー玉の運動が車体にうまく伝わらず、ヨタヨタした運動になってしまいます。

ビー玉自動車を走らせる“サーキット”は畳ではなく、板敷きの廊下の方が良く走ります。現代であればフロアリングのお宅も多いと思うので、楽しむことができますよ。学校の廊下や体育館なら、かなり遠くまで走らせることができるかも知れませんが、遊び方としては、スタートライルを決め、5メートルぐらい離れたところに円陣を書き、



図12 私が子供の頃ブリキゼロ戦が行き来した舞鶴橋



図11 雨だ。家の中で遊ぼうぜ

「第7話 子供の頃の遊び：プーリー飛行機」
 米沢市の中央部にある松岬（まつがさき）公園内の上杉神社境内では、毎年4月末に上杉まつりが開催され、多くの参拝者や観光客でにぎわいます。米沢に暮らす人にとつて例年のこととはいえ、雪害に悩まされる長い冬が去り、松岬公園のお堀沿いに咲き乱れる満開の桜の下を歩くことは、春から明るい初夏への移ろいを実感する、心の晴れる季節でもあるのです。松岬公園の正面入り口には舞鶴橋（まいづるばし）という石造アーチ橋があり、上杉まつりの時には橋の欄干のすぐ側まで、出店や屋台がところ狭しと並びます。先日、「広報よねざわ」の2015年4月1日号に、この舞鶴橋が歴史探訪として紹介されており、私の子供の頃の遊びを鮮やかに思い出しました。

私が小学校高学年の頃だったと記憶していますが、夜になってから上杉まつりに連れて行ってもらう機会がありました。人々が行きかう道路にはほんぼりが灯り、屋台の明りで照らされて明るいのですが、上杉神社を囲むお堀の水は真つ暗です。そんな中、舞鶴橋に向かって近づいていくと、橋のたもとと灯籠のそばから、お堀を渡った対岸となる上杉神社敷地内にある桜の木に向かって、かなりの速さで緑色の光が行ったり来たりしています。橋のこちら側は沢山の人がかりで、大声でお客を呼び込む口上を聞こえてきました。「さあさあ、自在に行き来する飛行機だよ！夜になったら明かりもつくよ！イギリスからキリギリス、ヨーロッパからハラッパ（原っぱ）へ、どんどん飛んでいくよ！」とガラガラ声を張り上げていました。人ごみをかき分けて近寄ってみると、緑色の催しなどを行商して旅すおじさんが立っています。おじさんの手元には手のひら

カーリングのように、その円陣の真ん中に最も近いところへ届くことができた人を優勝とする遊びも考えられますね。友達何人かで競った方が面白いのではないのでしょうか。

私が歯医者さんの息子さん兄弟と作ったビー玉自動車は、お住まいと診療室を結ぶ長い廊下をサーキットとし、夕方遅くまで、速さや到達距離を競って遊ぶことができました。図11に、雨が降ってきて家の中でビー玉自動車を作つて遊ぶことになった、幼き日の思い出写真を飾ります。

を上げたぐらいのブリキでできた、ゼロ戦に似た格好の飛行機があり、操縦席の部分には緑色の豆電球が乾電池で点灯するようになっていたのです。ゼロ戦は第2次世界大戦で戦った日本の戦闘機です。

お祭りの夜店では、人が集まった頃合いを見計らつて、行商のおじさんが片手をさつと頭上にかざします。するとブリキゼロ戦はおじさんの手元を離れ、対岸の桜の木に向かって豆電球を点灯させながら一直線に飛んでいきました。対岸についたところでおじさんが手を足元までおろすと、今度はブリキゼロ戦がおじさんの手元に戻ってきました。暗闇のお堀の上を軽々と行き来するゼロ戦に、少年の私はしびれました。翌日気になった私はとるものもとりあえず、お昼の舞鶴橋のたもとへ駆けつけて、幸いにもまだ営業していたおじさんからブリキゼロ戦をよく見せてもらいました。夜のお堀の上を軽々と行き来していたゼロ戦は、機体上部の中央付近にプーリー（滑車（かっしや）とも言いま

す）がつけられ、おじさんの手元と対岸の桜の木の間に張られたたこ糸を伝って行き来していたのです。おじさんが手を上げると対岸の桜の木に結んだ高さより高くなつて、ブリキゼロ戦は対岸に向かって飛んで（滑走して）いきま

すし、対岸に着いたら下げるおじさんの手先は対岸の桜の木に結んだ高さより低くなるように、対岸の桜の木に結ぶ糸の高さを調整してあるので、ブリキゼロ戦は折り返しておじさんの手元に戻ってくるうまい仕掛けでした。昨晩は夜だったので、おじさんの手元と桜の木の間に張つてある黒いたこ糸が闇に溶け込み、ブリキゼロ戦が自在に行き来しているように見えたのでした。神社入り口の舞鶴橋たもとにある灯籠のそばから、お堀をまたいだ対岸までは20メートル以上の長さのたこ糸を使つていたと思われ、飛行機が滑空していく様子を充分楽しめたのです。ブリキゼロ戦の値段は、確か150円ぐらいでしたと記憶しており、当時の小学生としては貯金箱をひっくり返してようやく買えるぐらいの高価な買い物でしたが、何とか買うことができました。つまみ帽をかぶり、今にして思えば、フーテンの寅さん“のモデルではないかとさえ見える服装だった威勢のいい行商おじさんを思い出します。図12は松岬公園の舞鶴橋。この脇をブリキゼロ戦が颯爽と行き来したのです。

1.6cm ビー玉
自動車用

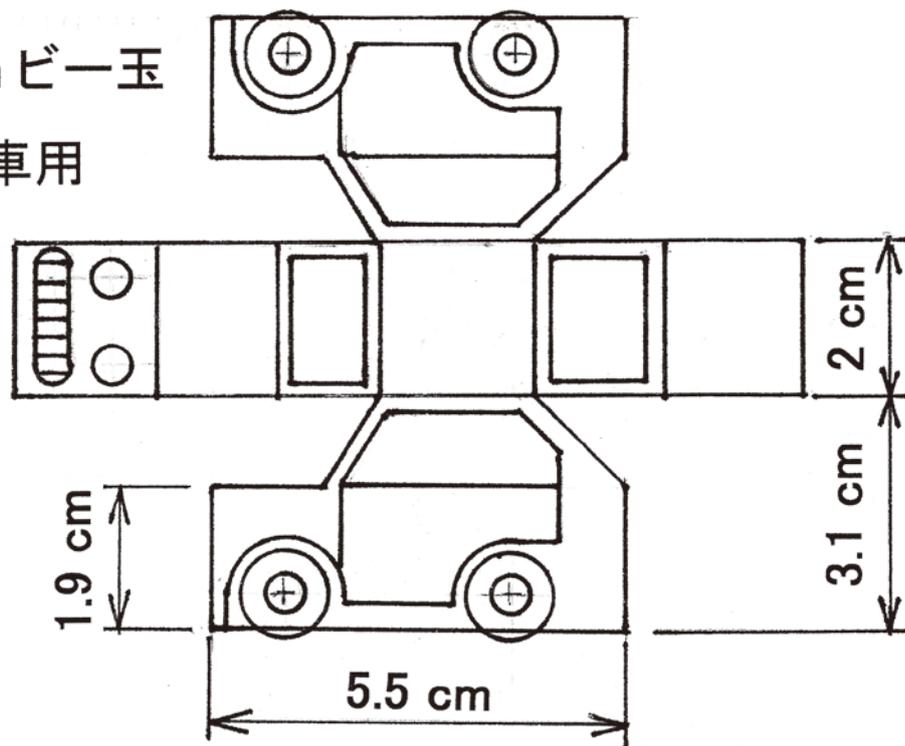


図8 ビー玉自動車展開図

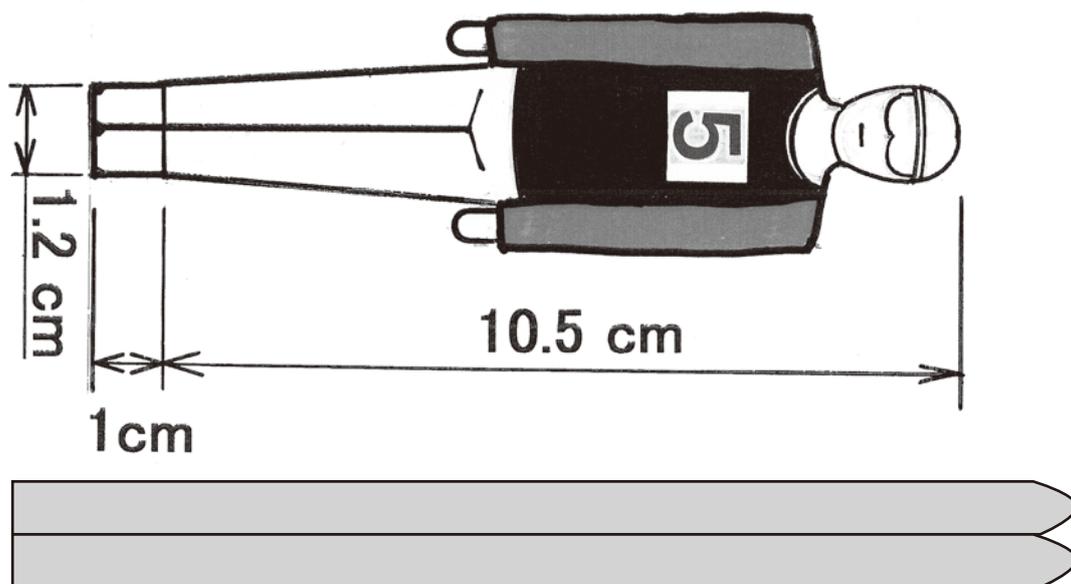


図15 ジャンプ選手製作図



図14 プーリーゼロ戦大空を行く



図13 手元を離れるブリキゼロ戦

さて前置きが長くなりましたが、このプーリーで吊ったブリキゼロ戦と同じ原理のおもちやを作ってみました。図13、14は、模型付きのマガジンで購入した模型のゼロ戦にプーリーを取り付け、タコ糸を通して滑走していく様子です。この飛行機はプラモデルなどでも構いません。まるで空を飛んでいるようですね。針金を通して回転するプーリーの下に模型の飛行機をぶら下げるといって、安くて簡単な工作だけで、その飛行機が飛んでいく様子を眺めることができますよ。ただし格好の良い飛行姿勢を保つにはちょっとしたコツがあります。飛行機には重心（じゅうしん）というものがありますから、プーリーで吊り下げる機体に通す針金の位置が重心を通り、機体のできるだけ上の方に針金を通せるように、慎重に工作してください。重心は機体の長さや幅の真ん中のことではありません。飛行機の前後左右の重さの中心の事であり、ほとんどの飛行機では、模型の場合でも、主翼の前後の幅の、少し前寄りの辺りです。針金でぶら下げる穴を飛行機の機体を開ける位置は、機械のことなどに詳しい大人の人に聞いてから開けた方が間違いないでしょう。プーリーはプラモデルなどを販売している模型工作品のお店へ行つて、お店の人に相談してください。そんなに高価な部品ではありません。プーリーは大きいとかえって安定が悪くなるので、直径1センチメートルぐらいのものを選んでください。糸をかける溝はできるだけ深い方が、溝から糸が外れないので都合が良いです。プーリーを通して飛行機をぶら下げる針金の太さは、直径0・8ミリから1ミリメートルぐらいあれば充分であり、プーリーは軽く回るようにしてください。飛行機を滑走させる糸はたこ糸などが丈夫でよいのですが、あまり太いと目立つので格好よく見えません。飛行機が軽ければ木綿糸でも充分です。

そしてもし、このエッセイを読んでくださっているあなたが女の子なら、飛行機のプラモデルなどでなく、同じ原理で、スタジオジブリのアニメ、“となりのトトロ”に登場するトトロ人形や、“魔女の宅急便”に登場する主人公の女の子：キキの人形に、針金でプーリーをつけてあげれば、あなたのキキの人形も空をスイスイ移動できるようにしてあげられますね。あなたの隣の家の子がお友達なら、

その友達のお家の窓と、あなたの家の窓の間に糸を渡し、キキが行ったり来たりするようにできるかも知れません。いろいろ工夫すれば楽しいですよ。

「第8話 子供の頃の遊び：ミニジャンプ台」

子供の頃の遊び：ミニジャンプ台は、雪国米沢ならではの遊びです。冬のスポーツの代表であるスキートのジャンプ競技を取り入れたものです。踏切板から飛び出し、美しいフォームで空中を飛翔するスキージャンプは冬季スポーツの華ですが、だれにでもた易く取り組めるスポーツではありません。そこで家の庭に雪を積み上げてミニジャンプ台を作り、スキーをはいた紙人形を作つてジャンパーとして飛ばせて、飛距離を競う遊びを考え出したのです。

まずは家の中で、ジャンプ選手の人形を作つてしましましょう。図15は、ミニジャンプ台を飛ばせる紙人形の選手と、選手にはかせるスキーの制作見本です。材料は、ジャンプ選手の人形は菓子箱などに使われているボール紙で、厚さは0・5ミリメートルぐらいのものが適しています。このボール紙を文房具屋さんなどで買う場合は「0・5ミリ厚さの板目紙（いたがみ）をください」と言えば、工作用紙として出してくれますよ。スキーはプラスチックが良いです。これも文房具屋さんで買う場合は「プラバン」と呼ばれているいろいろな大きさのものを売っていますから、厚さ0・5ミリメートルの物を1枚買えば足ります。友達の間も作れますよ。私達が子供の頃は、勉強に使う下敷きがセルロイドと呼ばれるプラスチック板だったので、その一部を切り取って使いました。寸法は写真に記入してある寸法を参考に作ればよいのですが、友達数人とジャンプ選手を作つて飛ばせ、飛距離を競う場合には、不公平にならないように、ほぼ同じ大きさになるように規則を定めてその範囲で作ってください。例えばスキー板は幅が1・2×1・4センチメートルの間にはいること、長さは12×14センチメートルの間に入るように決めて作ります。スキー板の先端は、本物と同じようにとがった形にし、上に向けて反るように曲げます。この曲げ具合はスキーの滑るスピードと飛距離に影響します。ボール紙で作るジャン

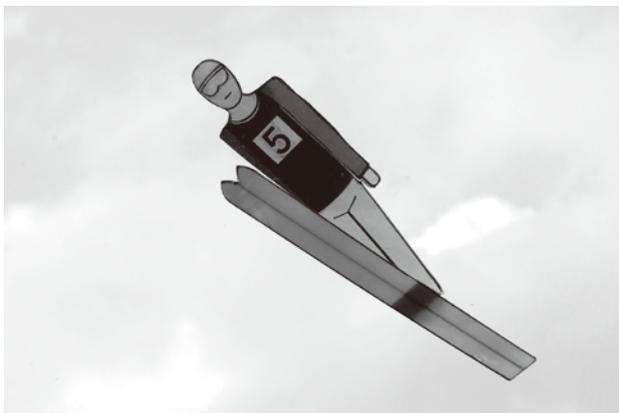


図17 ジャンプ選手人形の飛行

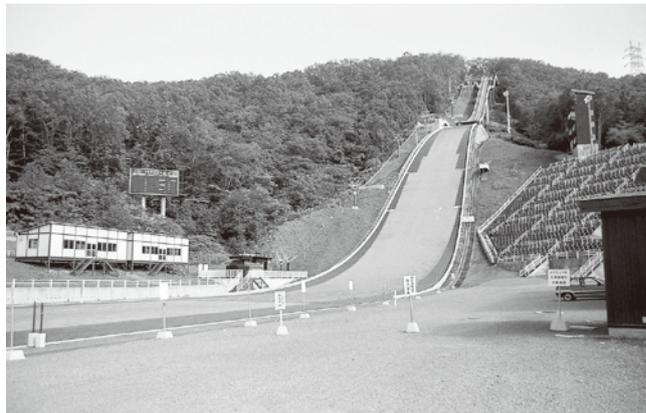


図16 1972年札幌オリンピック会場になった宮の森ジャンツエ (昭和60年)

プ選手人形も、その幅を3〜3・5センチメートルの間、身長は9〜10センチメートルの範囲に入るように描いて人の形に切り抜きます。人形の足元は人形をセメダインやボンドなどの接着剤でスキー板に接着しなければなりませんから、接着するのりしろを1センチメートルぐらい作って置いて、そののりしろ部分だけをスキー板に接着します。選手の足元、即ち、くるぶしのあたりで選手の体を前倒しに曲げてやり、選手が深い前傾姿勢（ぜんけいしせい、体を前に倒すこと）になるようにします。この時、スキー板のどの辺りに人形を接着するかや、人形にどれぐらい前傾姿勢を取らせるかで、ミニジャンプ台を跳ばせる時の飛距離がすごく違ってくるのです。友達とジャンプ選手を何人か作って競わせる場合は、各人形にゼッケン番号を決め、人形の胸と背中に書いておくと、ぐっと競技会の雰囲気が出ますよ。ここまでは、家の中でしておく工作です。雪降る日の夜にでも準備が出来ますね。

さて晴れた冬の日、外に出ます。米沢は雪が有り余っていますから、雪玉を転がして大きくし、ジャンプ台の形に積み上げ、シャベルで形を整えます。ジャンプ台全体の形は、図16を参考にしてください。図16は札幌市にある宮の森ジャンプ競技場で、1972年に開催された札幌冬季オリンピックのジャンプ競技会場となりました。宮の森では70メートル級のジャンプ競技が行われたのですが、日本選手が金・銀・銅メダルを独占し、その後、日の丸飛行隊と呼ばれるようになったのです。

私達が作るミニジャンプ台は、ジャンプ選手をスタートさせるアプローチのつぺんから、選手が着地するランディングバーンの一番下までの高さが2メートルぐらいになるように作ると、迫力のあるミニジャンプが楽しめますよ。ジャンプ選手が加速するアプローチ部分、選手が空中へ跳び出す踏切板（カントテといひます）、選手が着地するランディングバーンと、選手が減速する減速区間を形作り、ジャンプ選手が通るジャンプ台の表面は、シャベルの裏を使ってこすり、滑らかなジャンプ台の表面になるように仕上げます。最後にアプローチ区間には、スタート点から踏切板に向かって真っすぐに幅2センチメートルぐらい、深さ2〜3ミリメートルぐらいの溝を1本切ってやります。ジャンプ選手が滑り降りて加速するレールの役目をする溝ですが、この溝がないとジャンプ選手があちこちに転げ落ちてしまい、ジャンプできなくなりますから、必ず溝を切ってください。踏切板は水平よりもわずかに下向きになるように作ってやります。これは本物のジャンプ台と同じです。ランディングバーンの形や大きさは、試しに一度ジャンプ人形を跳ばせてみて、距離不足とならないように大きめに作ってください。ランディングバーンの傾斜は、一番傾斜のきついいところで、水平に対し、大体35度ぐらいの角度で作ると良いようです。踏切板の下からランディングバーンに向かって巻き尺を伸ばして取り付け、ジャンプ選手の着地点までの飛距離が測定できるようにしておいて、だれのジャンプ選手が一番飛んだか記録しておくのも記念になりますね。

さあ、準備ができたなら、友達と一緒にジャンプ選手を跳ばせましょう。アプローチのつぺんにジャンプ選手人形を置き、指を離せばジャンプ選手はアプローチの溝を滑走して加速し、踏切板から大ジャンプをするはずですよ。図17はジャンプ選手人形が飛翔する姿です。格好いいですね。転倒しないでランディングバーンに着地したジャンプだけを有効と決めて、飛行距離を競うのが良いでしょう。

私がこの遊びの工作をしたときは、ジャンプ選手にはかせるスキーを、竹で作ったり、木を削って作ってみました。雪に接する滑走面が滑らかなセルロイド製が、一番飛距離が延びました。このエッセイを読んで作る君のジャンプ選手はうまく跳べましたか？

米沢市館山には、御成山（おなりやま）ジャンプ台が整備されていますが、私が子供の時期を過ごした当時は、インターハイをはじめとして本物のジャンプ競技も盛んにおこなわれていました。私も何度か観戦に行きましたが、御成山の着地後の減速区間は空き地がないために逆斜面と呼ばれる、上りの山の斜面がランディングバーンの向かい側にあるのです。踏み切り板から跳びだしていく多くの選手達は、逆斜面に向かって激突するような感じで踏み切らなければならぬので、すごく怖いジャンプ台だと言っていたのを印象深く覚えています。またその頃のスキージャンプの飛行フォームは、サツツと呼ばれる踏切動作後、2枚



図18 米沢市、信光寺本堂と松の木。宝探しにたびたび登場した（昭和61年）

のスキー板を揃え、前傾しながらも両腕をブンブン振り回していたのです。少しでも飛距離を伸ばそうとする動作なのか、バランスを取るためなのかはわかりませんでした。不安定な動作なので、観ていてハラハラしたものです。時が流れ、その後のジャンプ競技では、踏切後スキーの先端を開いて浮力を稼ぎ、飛距離を伸ばすV字飛行フォームに変わってきていますが、皆さんが作るミニジャンプ台を跳ばせるジャンプ選手人形のスキーは、2本を揃えた形で作って下さいね。このミニジャンプ台遊びには、科学する内容が数多く含まれていて、勉強になりますよ。

【第9話 子供の頃の遊び：宝探し】

私達が子供の頃、3〜4歳年上の上級生が仕切ってくれる面白い遊びが沢山ありました。中でも何が起きるかワクワクして期待感が膨らんだのは、1年に1度ぐらいの割合であった宝探しゲームでした。ある日の午後、町内の遊び仲間である小学生の子供達7〜8人に声がかかり、いつも遊んでいる広場に集められます。そこには中学2年か3年生のお兄さんが待っていて、集まった子供たちに今日の遊びの説明をします。小学生達にしてみれば、3歳ぐらい年上の中学生のお兄さんはかなりの大人であり、言うことを聞かなければなりません。今日の遊びは『宝探し』と言う探検で、この広場から出発し、次々に出てくる地図や指示書に従って次の地点へ移動し、最後までたどり着けば宝が埋まっているというのです。怪我などをしないように、お兄さんは後について来てはくれませんが、地図を読んだり、指示書を解読して行動することは、全部、宝探しに参加する子供たちだけで解決しなければなりません。宝探しはお兄さんが小さく丸められた最初の指示書を空高く放り上げるのが開始の合図であり、この紙が落ちてくると、子供たちで奪い合った末、誰かが手にし、急いで中を見ます。そこには指示や地図が書いてあるのです。『町内の○○さんの家の牛乳箱の中を見よ』とあるので、われ先にそのお宅に行つて牛乳箱のふたを開けると次の指示書があり、『横丁のお稲荷さんがある祠の中を探せ』と書いてあります。その祠に行くとき次の指示書があり、『町内の一番端にある電信柱の広告板の隙間にある地図をとれ』などと、表か

らは見えないところに工夫した指示書が次々に続いて来るのです。そのたびに町内中を駆け回らなければならぬので大移動です。この宝探し遊びの範囲は、原則として隣の町内には及ばないという不文律があったようですが、一か所だけ例外があつて、私達の隣の町内である館山口にある信光寺（しんこうじ）というお寺様の境内は、必ずと言ってよいほど、地図などの隠し場所として登場しました。遊び場所の少なかった子供たちにとって信光寺幼稚園の広場は貴重であり、広場を開放して下さっていた信光寺さんには大変お世話になったものでした。信光寺の本堂は高床式になっており、その縁の下は、遊んでいてにわか雨が降ってきた時に雨宿りをしたり、宝探しに登場する場所として、しばしば使われたのです。図18に、信光寺の本堂と、その裏にそびえ立っていた松の老木の写真を示します。この信光寺以外では、指示書の隠し場所は、川の中に入つて行かないとたどり着かない橋の下だったりして、容易には見つけれられないようになっていました。指示書の場所にたどり着いても時には厳しい仕掛けもしてあるのです。隠し場所の奥に地図の封筒が見えるのですが、その手前に釣りに使うテグスが張つてあつて、暗くてそのテグスは見えない仕掛けです。地図の入った封筒を見つけた嬉しさに、あわてて暗がりにも手を出すとテグスに引っかかり、テグスの先は、針がゴム風船を刺して割るようになっていたり、空き缶に入れたかまどの灰がひっくり返つて頭上から降ってくるように仕掛けられていたこともありました。あるときなどは大きながま蛙の背中に手紙を背負わせてあり、その蛙が逃げないように足を結んであつたこともありました。しかし子供達は身軽でしなやかだから、どんなところもすり抜け、あるいは飛び越え、よじ登つて前進し、何とか宝物にたどり着くことができたのです。宝箱は大抵畑のようなどころに埋められ、その上を草で覆つてありました。これを掘り起すのが楽しみなのです。かぶせてある土は柔らかいので、間違ひなくこの下に宝箱があると分かり、子供たちが掘り返す手にも力が入ります。そしてやっと出てきた宝箱には、相撲の横綱の大判プロマイド、色つきビー玉や、ぱんぱいと呼んでいたメンコ、般若やゴリラのお面、金色にめっきした短剣、変装用の月光仮面サンングラス、古銭の天



図20 カバヤキャラメルとカバヤ文庫の小公女(ライブラリーにて)



図19 カバヤ食品(株)岡山工場(平成27年)

保通宝、切手集めの切手帳、野球のボールなど、子供心をくすぐるお宝が沢山入っていて、探検したみんなまで分けたら、一緒に使ったりできるようになっていました。このように、兄貴分格の子が、下級生を遊ばせ、自分も遊びをプロデュースして楽しむ術を知っていたのです。

ここに思い出してお紹介した宝探し遊びは、兄貴分である中学生が、いわば子供達へ縄張りを渡し、自分は子供の遊びから卒業して大人の世界へと進んでいく、通過儀礼でもあったのかもしれない。一見封建的にみえますが、年上の者が数歳年下の子供たちに遊びの面白さや、子供社会のルールを教え、団結の大切さも教えるサークル活動のようでもあって、町内の大人と子供、あるいは子供同士のつながりが強かった時代の優れた一面だったのではないのでしょうか。宝探しは、冒険心とチームワークを学べる奥深い遊びです。

「第10話 カバヤキャラメルくうぼん券」
昭和30年代はほとんどの町内ごとにちよつとした駄菓子屋が有りました。大きな商いではなく、その町内の子供達がお客さんのほとんどのようでした。とはいえ、ちよつと浮気をして隣の町内の駄菓子屋へ足を運んでみると、各駄菓子屋で扱っているものが店ごとに違っているし、その駄菓子屋なりの目玉商品もあって子供心を悩ませるのです。館山口の伊藤菓子舗では、少年雑誌に連載され、ラジオ放送もされた『赤胴鈴之助』のサイコロキャラメルを売っていました。ラジオでテーマソングを歌っているのは吉永小百合でしたが、少年だった我々は、彼女が長じてあんなにいい女になり、我々の手の届かない存在になるなどは気が回らず、真空斬りばかりに気を取られていた『僕らの仲間、赤胴鈴之助』でした。キャラメルを買うと、くじを1枚引くことができます。そのくじには赤、胴、鈴、之、助のどれか1字が描いてあるのです。赤胴鈴之助の5文字全部をそろえて台紙に貼って提出すると剣道の竹刀が一本もらえ、剣をとっては日本一の剣士になれると思わせるような筋書きになっていました。なーんだ、簡単なことよと思いは、毎日キャラメルを買いあさったのですが、引くくじには鈴の札が現れず、赤、胴、之、助の4枚だけが積み上げ

られていくのです。台紙の『鈴』だけが埋まりません。日々は空しく過ぎていくので、私はそれまでした事も無かった仏壇へのお参りをしてから買いに行ってもみたのですが、ついに『鈴』が出ることはありませんでした。恨みの『鈴』であります。私達の遊び仲間も、『鈴』は無いんじゃないか?などと噂し合っているさなか、私達の上級生であるいわばガキ大将の手元には、ちゃあんと『鈴』の札もあることが見つけられたのです。不思議な力関係、いや天の配剤だと思っただけでした。

これと並んで同じく10円で買えるキャラメルにはグリコがあり、滋養豊富、一粒三百メートルと書いてあるのだから、たくさん食べてみましたが、100メートル競走を何度走っても速く走れる効果は表れませんでしたね。あれは300メートル走るカロリーの事なんですね。

それに比べると、カバヤキャラメルのクーポン券、これは良かった。カバヤのキャラメルは館山口の駄菓子屋『かき屋』で扱っていて、1箱10円でした。このクーポン券は書籍クーポン券といって色々な変遷があったのだと後で聞きました。昭和30年代中ごろに私が集める事ができたのは、緑、赤、黄、水色などに色分けされたクーポン券でした。クーポン券は、ひらがなで「くうぼん券」と書いてあったのを覚えています。

何色が何点だったかは忘れましたが、例えば緑が1点、赤2点、黄色5点、水色10点といった具合にランクがあって、子供心をコチョココチョコとくすぐるのです。キャラメルの箱の封を切って引つ張り出すと、キャラメルを載せた船と箱の隙間にクーポン券がちらりと顔をのぞかせます。それが見慣れないポイントの高い色だった時の驚き!思わず息を呑んで反射的に箱を閉じてしまします。一呼吸置いて再度開けてみると、オオ! 出た。期待してはいるものなのに、母などは私に何かあったのではないかとおぼかしていたものでした。確か25点分貯めて郵送すると、『ぼくら』や『少年画報』といった月刊少年雑誌を送ってもらうことが出来たのです。当時の少年向け月刊誌にはこれでもかと言うほどの別冊漫画や、ボール紙で作る軍艦や、飛行機や、お城の模型がついていたので、ものすごい宝物をもらった気が



図22 カバヤキャラメルくうぼん券（ライブラリーにて）



図21 見学コースには小さなお客様用お立ち台でおもてなし

しました。確か雑誌には『別冊10大付録』などと、購買意欲をあおる次号広告が大きな文字で踊っていましたし、事実、はじけ飛ばさないように紙紐でくくって届けられるその月刊誌は、本の間に挟みこまれた付録でハンバーガーのように口が開き、ちよっとした小包ぐらいの量がありましたから、受け取った私達少年は満足感いっぱいでした。別冊漫画はB5版ぐらいの小さなものでしたが読み切りとなっていましたし、何せ数があつたので、近所の子ら数人と廻し読みするのも都合が良かったのです。テレビの無かつた頃、廻し読みでコミュニケーションを図る事ができ、カバヤのクーポン券も大いに役に立ったのです。

このような楽しい思い出をもらったカバヤ食品さんは今どうしているかなと思ひ出し、折良く仕事で岡山出張があったので、工場見学できないかと調べたところ、岡山市北部の御野津々口（みつののぐち）という所に工場があり、広く工場見学コースを開放していることがわかりました。予約を入れて訪問したところ、丁度、子供も見学できる一般コースに合流して見学できました。1、2歳のお子さん

と、そのママさんたちの団体ですごく賑やかでした。カバヤ岡山工場と見学コースの様子を図19、20、21に示します。カバヤ食品は『おとなしく、平和を愛する』という穏やかなイメージのある動物のカバを社名とし、昭和21年に岡山市に誕生したそうで、『子供たちに夢と希望を』という願いの元に菓子作りを続けて来られたそうです。カバヤ岡山工場には、創業間もなくの頃からの資料やライブラリーが整備され、清潔な生産ラインの見学コースが設けられていました。楽しく見学した中でも私が特に強く感じたのは、子供たちを大切にしたいと思うカバヤ食品の気持ちが見学コースづくりにも実行されていることでした。工場のラインに沿って設けられた見学コースには、お菓子の生産の様子が見える窓があつて、歩き始めて間もない幼児も生産ラインを見おろすことができるように、小さなお客様用のお立ち台^①が設けてあつたのです。好奇心が盛んになる子供であれば、自分で納得できるように見たいはず。文字通り子供目線のお立ち台が用意してあり、カバヤ食品の顧客サービスに触れることができました。

見学を終え、帰り際に私が広報の方に、私が子供のころ

からのカバヤさんのファンであることを告げたところ、昔発行していたカバヤ文庫の交換券などの資料を持ってきて下さったのです。そしてなんと展示コーナーの隅に、私が必死で集め、少年雑誌を応募した、あの「カバヤくうぼん券」がありました。券の色もまさに赤と緑、お互いに何点貯まったかを見せ合った子供の頃の友達の顔まで思い出しました。50年以上経たなくくうぼん券との再会に大感激し、カバヤさんに感謝したことでした。図22に撮影させて頂いた「カバヤくうぼん券」を記念に掲載させて頂きます。ありがとうございました。

「エピソード・謝辞」

一つの思い出のかけらが手のひらに乗ると、何気ない日常の懐かしい風景が次々によみがえりますね。キーワードを紡いでもう少し旅をしましょうか。

鼻がツンとした雪解けの空気が、学校帰りに出会った桜吹雪、小学校の教室から見えた校庭を駆け昇る入道雲、てんぶらを揚げたように降り注ぐ蝉の声、時折り透き通って見える小川の川底、清水で冷やされている真っ赤なトマト、秋の稲田を渡る風の刻印、吾妻山から降りてくる立冬の木枯らし、石炭炊きダルマストーブ、マッチを擦ったイオウの臭い、アルミのお椀に入った脱脂粉乳、ばあちゃんが作ってくれたケトケトのじんだもち。ちぎったコンニャクが入ったあつたかい芋煮……。

あなたが想い出したのは、自分を褒めてくれた両親ですか？それとも悪さをして叱られた時かばってくれた祖父母でしょうか？おぼれかけた水遊びの怖さですか？ボンネットバスの甘い香りの排気ガスですか？彼女の気を引きたい一心で練習を始めたギターの音色ですか？下駄箱の前で目をつぶって渡した告白の手紙でしたか？

思い出の広がりには尽きませんが、私達の手元に残った懐かしい写真は、その時代のかげ替えない卒業写真でありたいですね。

今回の昭和からのエール、青春・幼少期編その3の執筆に際し、お話を伺い、写真や写真の素材を提供いただいた小山信助様、稲葉重貞様、カバヤ食品株式会社様に、誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

ご挨拶

『昭和からのエール(青春、幼少期編・その3)』をお読み頂きまして誠にありがとうございました。思い出のかけら達との昭和の旅はいかがでしたでしょうか。

本エッセイの執筆に際しては、記憶に基づきできる限り正確な記載を心掛けましたが、主に昭和30年代から40年代にかけての出来事をとりあげましたので、誤認や誤字もあろうかと思えます。お気づきの方はご指摘ください。

またこのエッセイに対するご意見や感想、続編希望などのご要望もお寄せいただければ幸いです。あて先は次のEメールへお願い致します。

Eメールアドレス bestseishin@ybb.ne.jp

平成27年9月

伊藤

均

※本刊行物に記載された記事並びに画像の無断引用・転載はお断りいたします。

